

この頃作つた童話、童謠

吉井さんは詩情豊かな保母さんです。時折かうして自作のものを寄せられます。皆さんもさうか吉井さんのやうに作られ、こちらへ送つて下さい。編輯係り

群馬 柳範
女子部 附屬
幼稚園 保母

吉井正子

童話

太郎と手紙

「太郎ちゃん大きく成つたら何になるの？」太郎はさつきから大好きだつたおとなりの小父さんがよくお聞きに成つた事を想ひ出して居りました。小父さんは太郎の家へいらつしやる度にきまつて頭を撫で、下さいました。

「僕ね、飛行機のり」太郎は小父さんを見上げながらかう答へたものでした。

何時も何時もやさしかつた小父さん、面白いお話を聞かせてくれた小父さん、太郎にはどうしても小父さんの事が忘れられませんでした。

その小父さんに召集令が来てお別れしたのはついこの間の様に思へますのに最早半

年も経つてしまひました。今は南の國で勇ましい進軍をしてゐらつしやることその他、太郎には小父さんの事は一寸もわからなくなつてしまひました。小父さんが驛をお立ちになる時太郎はだれよりも早く驛までかけて行きました。

自分で作つた旗をふりながら「小父さん」と飛び入んだ時澤山の日の丸の旗にまかれて立つて居た小父さんは「おや太郎ちゃん」とびつくりした様に太郎をちつと御覽になりました。「小父さん、戦争に行くんだつてねがなんばつて米英の奴やつ、けて」太郎は大聲で言つたつもりでしたが、何だか體が硬くなり聲がのどにつかへて後の方は大人の人の萬歳で消されてしまひました。太郎はたゞ力一ぱい自分の旗を高く上げながら小父さんを見失ふまいとしてゐま

した。
この日の小父さんは何時見た時よりもどんな時よりも勇ましく強さうに見へました。

「日本は勝つぞ、こんな強い小父さんが居るもの」太郎はこの時固く心に思ひました。あの日から太郎は小父さんの事を一日も忘れた事が有りません。

太郎はふと高いお空を見上げました。今日は何て綺麗な日本晴でせう。櫻のお花もゆれて居ます。

「小父さん」太郎は南の空に向つてそつとよんで見ました。

「おーい太郎ちゃん」何だか小父さんの大きな太い聲が聞えて来る様な氣が致しました。

このお空の續く所の何處かで小父さんが戦つて居られる。さう思ふと急に體中に力が入つて來ました。

小父さんもきつと戦ひの間にはこのお空を見て居られるにちがひない。太郎はさう決めて考へて居る中に、ふと、或ることを思ひつきました。太郎は大急ぎでお家の中にかけて入むと、机の前に座りました。クレ

ヨンと紙とな太郎は夢中で机の上にそろへました。

そして、一番先に、先づ青いお空を書き次に櫻を書きました。それからその下にお空を見てゐる自分を書き足しました。

太郎はこゝろしながら裏に今度はかう書いたのです。

「ラザサン オゲンキデスカ ホクイマ
オソラミテタララザサンノコトトテモオモ
ヒダシマシタ ラザサンシンゲンハイサマ
シイデセウネ ホクモイマニオホキクナツ
タラ ベイエイラヤツツケニユクヨ ホク
ワ センシヤガスキテス ホクトキドキ
コレカラ オエカキシマス ソシテラザサ
ンニオクリマス マツテ、クダサイ タロ
ウ」

太郎はこれだけ書くどほつとして紙を四つに折りました。太郎はどうして早く手紙を出さなかつたのかと思ひました。太郎は時々これからはかうしてお手紙を出さうと思ひました。小父さんもごんなにおよろこびになるでせう。

「萬歳！」 太郎は大聲でさけぶとおとなりへかけて行きました。慰問袋の中に入れ

ていたとくのです。

第一番目の太郎のお手紙は今お船のつて居ることです。海を越え波にゆられ戦地の小父さんの所につく日はもう直でせう。

太郎はお手紙をかくことが大好きになりました。どうしてつて、太郎は手紙を書いて居ると、何時も何時も大好きな小父さんとお話して居る様な気がするからです。

童謡

チャングルのてつべん

お空が近い
チャングルのてつべん
両手を上げて高い高い
それ！

落下傘の様にどび下りる

一・二・三

風のように早く飛び降りる

どの子もどの子も

ころけては又登る

チャングルのてつべん

青いお空だ！ 日本晴だ！

繪

新しいクレヨンが
頭をそへて箱の中
赤で赤いお屋根を
縁でやさしい草を
茶色で大きな木を
青で広いお空を
ほら出来上り
兵隊さんに送る繪が
新しいクレヨンでかけました

ほゞづき

ほゞづき ほゞづき

おばあちゃん ほゞづきおくれ

ほれおばあちゃん ふところから

出るよ 出るよ

赤い赤いほゞづき

いくつ出た

十五出た

十五で何しよう

東京の子にわけてやる

あとは

姉妹人形をつくる